

烏〈からす〉の森〈もり〉（三田市大原）

大原〈おおはら〉の里〈さと〉の国道に沿〈そ〉うたところに、こんもりとした森があります。

むかし、この土地に大原宗隆〈むねたか〉といって、つよい侍〈さむらい〉がおりました。家来〈けらい〉もたくさんおりました。このこんもりしている森が、むかしの城跡〈しろあと〉であります。このお城の森に、毎日夕方になるとたくさんの烏があつまって来て、がやがや鳴〈な〉きながらけんかばかりしていて、ひるは淡路〈あわじ〉の島〈しま〉の海辺に、さかなをあさりにゆくのだといわれています。



城主大原宗隆には、とても美しいお姫様〈ひめさま〉がありました。

三田川をへだてた貴志〈きし〉の里には、貴志五郎四郎義氏〈よしうじ〉といって、つよい豪族〈ごうぞく〉がおりましたが、息子〈むすこ〉の嫁〈よめ〉にげひにというので、このお姫様はお嫁にゆくことになりました。およめ入りの荷物は太へんなもので、田地〈でんじ〉だけでも三ヘクタールほど持参〈じさん〉したのであります。

はじめのうちは若夫婦〈わかふうふ〉の間も仲〈なか〉がよいし、両家〈りょうけ〉のつきあいも円満〈えんまん〉であったが、ふとしたことから不和〈ふわ〉になり、お姫様は実家〈じっか〉大原の里にかえって来ました。日々のお姫様のなげきを誰もなぐさめようがなかったが、菩提寺清原寺〈ぼだいじせいげんじ〉の坊さんがほとけの功德〈くどく〉を説〈と〉いてなぐさめたので、やっとお姫様も気をとりなおして朝晩仏をおがむようになり、ひる間〈ま〉は大磐若経〈だいはんやきょう〉六百巻〈かん〉の書き写〈うつ〉しをしました。紺紙金泥〈こんしきんでい〉といって紺色〈こんいろ〉の紙に金〈きん〉で字を書いたのであります。この仕事は、二年や三年で出来る仕事ではないが、このお姫さんの根気〈こんき〉と熱心さによって立派〈りっぱ〉に出来あがりました。今でも清原寺の宝としておさめられています。

この不幸〈ふこう〉なお姫様に村人はみな同情していましたが、亡〈な〉くなってからお城のとなりの烏の森に、姫山神社というお社〈やしろ〉を建てて、お姫様の霊〈れい〉をなぐさめました。

この烏の森の附近〈ふきん〉には、新しい住宅〈じゅうたく〉が建ちならんだが、この森はむかしながら烏のねぐらとなって夜通〈よどお〉し烏がさがさとないています。

お姫様が、貴志〈きし〉にお嫁入りにもっていった田地〈でんじ〉はもちかえったが、貴志の水はもらわないというので、三田川の底〈そこ〉をサイホンで通して、貴志の田地に水をおくっているということでもあります。

このお姫様の不縁〈ふえん〉のことがあってから、貴志と大原とは今でも縁組がなく、嫁のやりとりはないということでもあります。

この両村のよめのやりとりがないというのは、このお姫様の不縁のことばかりではなくて、土着〈どちゃく〉した民族〈みんぞく〉が、天孫〈てんそん〉民族であるとか出雲〈いづも〉民族であるとかによるのかもしれませんが。秋祭りにおみこしの渡御〈とぎょ〉があるが、それぞれ両方の村から見えないように、村中を巡る習慣〈しゅうかん〉になっています。